

開催日：令和 5 年 2 月 9 日（木）  
開催場所：釧路合同庁舎 5 階 共用第 1 会議室

## 釧路湿原自然再生協議会 第 26 回河川環境再生小委員会 議事要旨

会議の冒頭、事務局から第 26 回河川環境再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）について説明を行った。

### ■議事 1：茅沼地区旧川復元事業について

（委員）

ハンノキの環状剥皮の事業目的は多様な湿生植物群落を復元するという理解で良いか。

（事務局）

茅沼地区では湿原植生の再生が目標の 1 つとされている。蛇行復元した旧川と直線河道の間に挟まれている箇所が、現在もハンノキ林のままとなっている。この場所もヨシやスゲといった環境に変化することが期待されたが、植生の遷移が進まなかったため、変化を促す取り組みとして、試験的にハンノキの環状剥皮を実施している。

（委員）

多様な植物群落を復元するのであれば、種数や多様度の指数、希少種の種数などについて調査は行っているのか。

（事務局）

群落組成調査を実施しており、種数や希少種についても把握している。

（委員）

ハンノキが枯れて光環境が改善するのであれば、光環境に敏感な湿生植物に着目することで、より環状剥皮の効果によって植物群落が多様になったかがわかりやすくなるのではないかと思う。

（委員）

環状剥皮の調査結果をみると効果は明白であり、本施工に移行しても良いのではないかと思う。調査はいつまで実施する予定なのか。

(事務局)

調査では良い結果が出ており、モニタリングは光環境や地下水位の計測は続けていきたいと考えている。今後の展開としては、湿原植生への変化を促すことを進めていきたいと考えているが、茅沼地区はアクセスが難しいため、幌呂地区などで市民参加による実施など、自然再生の普及啓発とあわせて取り組んでいきたいと考えている。

(委員)

承知した。調査結果としては良い結果が出ているので、こういう取り組みを続けていくのが大事だと思う。

(委員)

茅沼地区の自然再生で目指しているのは1980年以前の環境である。この時の空撮を見ると河岸沿いにハンノキ林がある。それより湿原側は樹高と密度が下がり、支流が流れ、その支流沿いにハンノキの樹冠がなくなりヨシやスゲが確認されている。水位を上げることによってハンノキの林床植生が変わっている。ミゾソバ、ヤナギタデを中心とした少し乾いた状態の林床だった箇所が、水位が上がることでカブスゲ、ヨシ、ツルスゲ等に変化している。今回の試験によりハンノキの枯損、立ち枯れのあるハンノキ林がどこで生じているのか、植生が変化した林床がどこにあるのかが確認できると思う。1980年以前の植生に戻ってきており、そのような成果が得られたことをとりまとめ、手法も得られたと捉えて、次の段階に進んでいくと良い。

## ■議事 2 ヌマオロ地区旧川復元事業について

(委員)

カワシンジュガイが現況河道で見つかったということで、移植・調査に向けた調査を引き続きお願いしたい。ヌマオロ川のように河床材料が細かいと、ほぼ地中に埋まっているカワシンジュガイも多いと思う。そのあたりを注意して調査計画を検討してほしい。

(事務局)

来年度以降、移植に向けた調査を行いたいと考えている。移植・検討に際して皆さんにご指導・ご助言をいただきたい。

(委員)

鋤簾（じょれん）のようなもので河床をさらうと効率的に見つかるのではないか。

（委員）

外来種であるドジョウは殺処分となっているが、キタドジョウという在来種のドジョウが道東にいる可能性があるため、殺処分は保留してほしい。

（委員）

キタドジョウとドジョウはオスの胸ビレの付け根の骨の形でしか判断できないため、遺伝子解析等で判断する必要があると思う。両種が交雑している可能性もあるため、殺処分は保留してほしい。

（委員）

殺処分したドジョウは標本にしているのか。博物館に提供が可能であればお願いしたい。

（委員長）

特定外来生物などには指定されていないため提供は問題ないと思う。ぜひ研究していただきたいと思う。

### ■議事3 釧路川支川魚類生息環境の再生事業について

（委員）

2021～2022年は産卵床数が減少しているが、これは落差工の影響ではなく自然の変化なのか。

（委員）

このくらいの年変動は他水系の経験も踏まえると普通のことと捉えている。ただし、釣り人の影響なども考えられるので心配である。元々の数が少ないため、危機的状況であるのは間違いない。

魚道をつくる取り組みが進んできたおかげでサクラマス産卵床がだいぶ増えてきたことでもわかるように、川の環境自体は相当よくなっている。イトウは成熟まで時間がかかり、個体数も少ないという状況である。ある程度は人が手を貸して、人工飼育施設で増やすのは良いことだと思う。

(委員)

釧路湿原の他河川で調査しているが、やはり年変動はあり、この程度の変化はみられる。変動の周期があるかもしれない。

(委員)

令和 3 年に高水温に伴い猿払川やサロベツでイトウが多く死亡し、令和 4 年の産卵床数が半分くらいになった。釧路では高水温の影響はあったのか。

(委員)

釧路では高水温による影響は聞いたことはない。

(委員長)

釧路では我々が聞いている範囲では特に高水温の影響について情報はなかったが、産卵床数が低い要因については引き続き調査を継続していく必要があると思う。

#### ■議事 4 新たな自然再生に向けた調査河川について

(委員)

雪裡川では土砂流入対策と旧川復元のどちらを行うのか。また、雪裡川の土砂の溜まり具合や地下水位の状況など、現地ではどのような課題が生じているのか情報があれば教えていただきたい。

(事務局)

実施手法についてはこれから検討する段階である。現状として旧川がいくつか残っているため、旧川の活用も検討していく。また、久著呂地区で得られた土砂調整地の知見も生かし、最大の効果が得られるようにしていきたい。

雪裡川の状況については今年度、土砂流入・水循環小委員会の合同現地踏査を行った。上流の北海道区間では河床低下し土砂の流出がみられ、下流側で土砂の堆積がみられている。これにより、雪裡川の直線区域で水位が上昇して旧川に流れ込んでいる。流れ込んだ影響によって樹木の立ち枯れが起きている様子も見られた。地下水位についてはこれから調査を実施していく予定であり、詳しいデータは持ち合わせていない状況である。

(委員)

これから調査を行い方向性の検討を進めると思うが、湿原内部も含めて広く状況調査を行い、概略でも全体を捉えて対策を検討してほしい。水循環小委員会ではモデル開発を進めて物質環境の変化予測ができるようになっている。また、湿原全体の植生図を環

境省で作成しているのを参考してほしい。

(委員)

雪裡川は上流にいくと湧水が非常に多く、サケ・マスの自然産卵に非常に適した場所が多くある。芦別川の上流には水産庁の孵化場があるなど、水産業としても非常に重要な場所である。数年前にウライが撤去され、いま釧路川全体で非常にサケ・マスが多く遡上し、雪裡川も自然産卵している状況である。今後検討するにあたり、自然産卵の促進につながるような取り組みができると良い。猛禽類が集まるなど、生物の多様性にとっても非常に意義が大きい。

(委員)

釧路川の支川には依然として魚道のついていない落差工があり、サケ・マスの遡上障害となっている。魚道の自然再生事業で落差工を改善しているが、昨年、釣り人から新たな落差工ができたと言われ、確認したところ魚道が付いていなかった、ということが未だにある。そういうことがないように関係機関で上手く連携し、情報共有することをお願いしたい。

(委員)

雪裡川の音羽橋下流はタンチョウのねぐらになっており、観光客も大勢撮影に来る。この周辺でタンチョウの冬の餌場づくり、環境づくりなどを行っているという話を聞いているため、後で問題にならないように一度調整を図ることを勧める。

(委員)

林地を皆伐すると土砂が流れやすくなる。土砂流入を問題とするのであれば、河川に入らないように周辺環境を調べて対応を考えてほしい。上流は農地が広がっているが、農地からの流入を防ぐ対応も検討してほしい。直線河道の河床低下については、河床低下しないような対策をするのが良いのか、蛇行するのがよいのかかわからないが、色々検討してもらいたい。

(委員)

雪裡川はタンチョウのねぐらになっており、音羽橋はたくさんの方が訪れている。下流や芦別川にもねぐらがあるため、鶴居村で調査を行っている方々と連携をとって意見を聞いていただければと思う。また、サケ・マスの遡上河川であることから、遡上時期や稚魚が下流へ下る時期など、工事の実施時期についても影響を考慮してほしい。

このあたりではキタサンショウウオの調査は行われていないが、生息の可能性は高いため、調査をしっかりと行ってほしい。産卵時期である春先を逃さないように配慮して調

査に臨んでいただきたい。

(委員)

2号幹線排水路をどこに接続するかという見通しはあるのか。直線河道を埋め戻すということになれば、旧川に繋げるのか、旧雪裡川に繋げるのか。

(事務局)

2号幹線排水路は農業の施設であり、農地への影響があるため、今現段階では影響がないように存置することになると思われる。今後、地元との協議の中で自然再生手法の検討と合わせて検討を進めていきたい。

(委員)

鶴居村としては一大酪農生産地帯であり、タンチョウも生息している雪裡川でなぜ唐突に旧川復元という話が浮上したのか。

(事務局)

「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」のなかで、旧川復元の候補となる得る5河川が過去に選定されている。対策が行われていない河川の中で、湿原への流入土砂量の大きい河川として雪裡川を選定している。

(委員)

雪裡川は水量が出る川である。無理して蛇行化を行うと周辺農地の水捌けが悪くなるため、沈砂池という手法もあるのではないか。

(委員長)

雪裡川は湿原への土砂流入量が大きく、すでに土砂が湿原に入ってしまったっており、非常に影響が大きい河川である。必ずしも蛇行復元にこだわらず、これから対策を考えていくということである。

(委員)

雪裡川では大水が出て引くときに沈砂池に砂を置いていくと聞いたことがある。雪裡川の上流はどのようになっているのか。標茶のような森林を抱えた沈砂池では、毎年土砂を上げており、畑だけの沈砂池に比べてずっと多い。上流がどのようになっている、何が原因で土砂が入ってきているのか調べたほうが良い。

(事務局)

雪裡川の対策は北海道とも連携し、上流側も含めて今後の自然再生手法について考えていきたい。

(委員)

この事業では何年頃の土砂流入量を目標として仕上げていくのか。また、その時代の釧路湿原への土砂流入量はどれくらいだったのか。

(事務局)

雪裡川の目標設定については今後検討して設定していく予定である。全体構想では1980年代を最終的に目指し、当面は2000年代の負荷量を維持するという方針であるため、基本方針に基づいて、雪裡川でこういった目標にできるか考えていきたい。

土砂量については、水循環小委員会で土砂の経年変化を算出していますので参考にし検討していきたい。

(委員)

釧路湿原における蛇行復元の目的は、土砂をコントロールする機能であり、蛇行河川の機能を上手く活用して上流と湿原の維持を考えていくことだったと思う。茅沼地区、ヌマオロ地区と同様に、雪裡川に関しても蛇行河川を活用し、その蛇行河川の機能を活かして湿原への土砂の堆積をコントロールするということである。土砂の量に固執するのではなく、湿原の本来持っている仕組みを上手く活用し、湿原と我々の生活を共生していくという視点を持って取り組む必要がある。

(委員)

オソベツ川近くで営農しているが、蛇行化してから水が引かなくなり、かなりの被害を受けた。自然を回復しようと努力しているのもわかるが、農業を営んでいる我々のことも考えて事業を実施してほしい。そういう影響があるという話を事前に伝えてほしかった。影響について明白にして事業を行ってほしい。

(委員)

蛇行復元してからロールが10町歩流れ大損害を被った。こちらは生活が懸かっていることもよく考えて実施してほしい。

以 上